



親鸞と現代



小林 道憲

親鸞と現代

小林
道憲

はじめに

今日は「親鸞と現代」と題しまして、現代に生きる親鸞の思想についてお話したいと思います。必ずしも真宗学と一致しないかもしれませんが、ご了承くださいたいと思います。

最近の我が国の精神的な状況を見てみますと、一番、目につきますのは、青少年の凶悪犯罪が非常に頻発しているということです。これらの原因にはいろいろ考えられると思います。例えば、家庭や社会の教育力がなくなつて、躰しつけがなおざりにされているとか、青少年が、自分の体を通していろいろなことを理解するという体験が失われているということも言われています。しかし、一番ぞつとするのは、犯罪を犯した青少年諸君に罪の意識がないということです。人を殺してしまつても全然なんとも思っていない。誰でもよかつた、試してみただけだというような、ぞつとするようなことを言っているわけです。罪の意識があつて、悪いことをしたと反省することがありますと、宗教の立場からいいますと、救いに非常に近いということが言えるわけがあります。しかし、その罪の意識がありませんと、全く論ずまじということもできないということです、非常に困るわけです。

現代がそのようなところまで来ているとしますと、現代は、末法を通り過ぎて、法滅の時代ではないか。仏法が減んでしまつている。教えさえ無くなつてしまつた。少なくとも、犯罪を犯した青少年の心の中では無くなつてしまつたのではないかと思うほどです。そういうことを考えますと、まさに末法・法滅の時代としての平安末期から鎌倉初期のところを生き抜いていった親鸞の思想こそ現代に生きてくるのではないかと思うわけがあります。

罪の自覚——懺悔

そういう意味で、親鸞の思想、特に宗教思想を中心にお話してみたいと思います。先ほど、犯罪を犯した青少年たちの中に罪の意識が無くなつたと申しましたけれども、自分自身の中に煩惱が巣食つているということ深く自覚したとき、初めて我々は罪の意識をもつことができるわけです。その罪というのは、まさしく自己自身の奥底に沈殿し、それが自己の根底からつき動かしている、自分自身をつき動かしているという、そういう自覚をもつたとき、我々は誰もが深い意味で罪人である——別に犯罪を犯さなくとも罪人である、そういう自覚に至るわけでありませう。そして、そういう罪はどうすることもできない、自分の力ではどうすることもできない。そのとき、我々は神や仏の前で懺悔ざんげし、懺悔する以

外にない。こうなつたとき、ある意味で、救いは近いと言ふべきであります。

考えてみますと、親鸞の信仰も、まさにその人間の罪惡深重と、人間の無力ということの自覚から出発したわけです。罪というのは、他者の中ではなく自分自身の中に深く棲みこんでおり、そしてどのような手だてをしてもそこから離れることはできない、そういう自覚です。これがやはり何よりも大事なことなのです。親鸞も「高僧和讃」で「濁世の起惡造罪は 暴風駛雨にことならず」（聖典四九四頁）というふうに言っておりますが、まさに我々の罪というのは暴風雨のように激しくて避けることができない、その前では我々人間は無力であるということでもあります。そのことを深く自覚しますと、我々は深く仏の前で懺悔する以外にないわけです。実際、親鸞も『教行信証』の中で懺悔文を書いておられます。「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の教に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし」（聖典二五一頁）こういうふうには悲歎述懐しています。愛欲や名利を求める心に邪魔されて、極楽往生を約束された信心の人の中に入ることを喜びとせず、真実の悟りに近づくことを快しまない、そういう意味であります。この懺悔文は、おそらく親鸞八十歳前後に書かれたものと推定されます。すでに京都に隠棲しておまして、長年月たった晩年の親鸞であります。それにしても意外と生々しい告白文です。しかし、この文章にもありますように、親鸞自身は自分の心の奥底の罪障性というものを深く見ておられます。

振り返ってみますと、親鸞は比叡山で若いとき修行をしておりましたが、そこでもほんとうの悟りを得ることができなかった。越後に流されましたけれども、そこでも僧の身を全うできなかった。それから、関東布教においても、もしかしたら、もつともつと信者を増やしたい、というようなことを思っていたかもしれない。京都に帰ってからでも、関東で、我が子の善鸞に裏切られております。また『教行信証』をずっと書いていますけれども、そこでも、やはり書いていけば、学者臭き話をして、少し学問的にも浄土真宗のほんとうのところを書いて、他宗に勝ちたいと、そういうようなことを思ったかもしれない。親鸞の心の中に、そういう意味での愛欲とか名利というものがふつつつと出てくる。そういうことが、『教行信証』を書いているときに思い起こされたのかもしれない。それが懺悔文となつて現われたのではないかと思うのです。

また、「正像末和讃」の中でも、「浄土真宗に帰きすれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身に 清浄の心もさらになし」（聖典五〇八頁）。こういうふうには悲歎述懐しております。これも親鸞の最晩年のものであつて、八十六歳になつてはいるのではないか

と推定されます。その内容は、浄土真宗の教えに入ってはいるけれども、浄土を求める真実の心はなかなか起きない¹⁾というわけです。そして、自分自身のこの身はまさに虚偽の身であって、清浄な信仰を求める心もないというわけです。そういう意味では、親鸞の自己を見つめる眼は、歳を取れば取るほど非常に深まって、自分のまなざしを自分の中に棲んでいる罪障性というものに深く向けているわけであります。そういう意味では、親鸞という一人の宗教的な実存は、自分自身の中の虚偽というものの、虚仮というものを一生見てきた人ではなかったかと思うわけであります。

親鸞は、比叡山での長い修行を結局捨てたわけですが、それも、やはり表向き修行僧の形をとっているけれども、実は自分の中には全く煩惱熾²⁾の凡夫にすぎないと、そういうような自覚があったからだと思います。これはどんな修行をしても救われはしないと、こう思ったからに違いない。越後に流されましたも、すでに僧籍を奪われ、妻帯もしていません。だから、自分自身を「愚禿³⁾」と称したわけであります。それも表面上は僧の形をとっているけれども、全く自分自身のこの身は虚偽である、そういう深い自覚があったからだと思います。自分自身の中の深い罪の意識というもので、その自覚からきているわけがあります。その意味では、自分自身はまさに救いようのない罪人であって、そこから離れられない。そういうことを深く自覚していたのであろうと思っております。だからこそ、自分を「愚禿」と称したのであろう。罪に対する人間の弱さを深くして、それを徹底的に生き抜いていった人というのが、まさに親鸞という宗教的実存ではなかったか。

親鸞の無力感

しかし、そうしますと、もはや宗教的戒律というものは、ある意味で意味をなさないといいことになります。我々の奥深くにそういう根本的な罪というものがあるとすれば、それに対して我々は無力であって、何か善行を積んだり、戒律を守ったり、そういう努力をして、まさに自力の行をやって、その罪を克服するというようなことはできないことになります。その内なる罪、悪、煩惱、これがあるために戒律というものを守れない、そういうことをどうしても自覚せざるを得なくなってくるわけであります。戒律がある、しかし自分の底では全然それが守れない。そういうことを自覚してまいりますと、その葛藤は非常に深いものになります。悩み深いものがあります。そうすると、その悩みの極のところでは、まさに自己の努力で善根を積むということによって救いというものが得られるのではない、ということに気付くはずであります。そして、ただひたすら自分の内なる罪悪を仏

の前で懺悔して、そして一方的に仏の方から、仏さまの方から許されるという、そういう在り方でなければならぬということに気付くはずであります。これこそほんとうの救いというものであります。親鸞も、実際、二十年間比叡山で修行をしております。刻苦勉励、^{こつくべんれい}仏教の学問もやっております。修行もしております。しかし、どうしても自分の中の罪というものから逃れられない、ということに気付きました。修行に励めば励むほど、それに反している自分自身を自覚せざるを得なくなってくるわけでありました。

だから、親鸞は、比叡山での学問とか修行というものでは、どうしても悟りを得ることができない。そういう無力感に囚われたに違いないと思います。そのような無力感とか絶望感から、まさに親鸞は比叡山から下りる決心をして、法然が説いていた専修念仏の教えに帰依するという決心をしたのだらうと思うわけでありました。『歎異抄』に「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（聖典六二七頁）という言葉がござります。「いずれの行もおよびがたい」この言葉は非常に重い意味をもっています。そこには、親鸞の、比叡山での、いくら修行しても救われぬという体験、それが滲み出ているのではないかと思います。我々は煩惱熾盛、^{ぼんごうしじやう}罪悪深重の凡夫であります。こういう凡夫は、どんな修行をしても、どんな善行を積んでも救われることはない。仏の広大な力の前の人間の無力というものを、この親鸞の言葉は表現しているように思うのです。

人間の本性は悪

宗教的な観点から見ますと、我々人間の本性というものは悪であります。人間は本来悪だ、そして罪を背負っている、そういう存在だということです。そのことを深く自覚しなければならぬし、そう自覚したとき宗教心はより深まるわけでありました。宗教が深く自覚する人間の本性的な罪悪は、人間が人間としてあるということがもともと仏から離反しているというその自覚を深めます。人間が人間である限り、まさに罪なき者はない。人間は常に本来の在り方から外れた在り方として生まれている。しかも、それが人間存在の根底をなしているということ、それが深い意味での人間存在の罪悪性という意味であります。

浄土系の仏教では、特に人間を「罪悪深重の凡夫」と呼んでおります。親鸞においても、人間というのは業の海に沈没した無力な存在であって、まさに暴風驟雨のように罪を造って生きている存在である。人間であるということは、まさに罪ある存在だということである。そういう自覚が親鸞にも深くあります。しかし、そういう罪の自覚というものから、

宗教はまさに宗教として出発するわけでありませう。そういう罪の自覚がなかったら、救いもないし、宗教もないだろう。まさに罪を自覚するところから、救いを求める心が起きてくる。罪を自覚するから、苦悩する。そして、苦悩するから、まさに救いというものが待っているのです。だから、そういう意味で、自分自身の中の罪というものに苦悩するということがなければならぬわけで、その苦悩があれば逆に救いは近いというふうにも言えるわけがあります。

そういう深い罪の自覚というものから出発する宗教、浄土真宗や浄土宗など、浄土系の宗教は特にそうです。キリスト教なども、罪から出発する宗教であります。罪から出発する宗教というのは、人間というのはいつも重荷を背負っているという自覚から出発します。そうしますと、そこでは、自分自身の力で修行をして、罪・悪というものを克服するというようなことはやできないと考えることとなります。それらは、神とか仏から逆に一方的に救われるのでなければならぬと考えるのであつて、我が浄土系の思想も、そういうような考え方があります。これが他力の考え方であります。

深い絶望感——他力の信仰

我々には、自分自身の中に巢食うどうにもならない罪というものがありません。しかし、全く自分自身の無力というものを、これを自覚して、もはや自分の力でそれを乗り越えようとは考えない。法然は、末法の時代には智慧も曇り、実践の道も閉ざされているのだから、自分の力で悟りを得る道は放棄せざるを得ないということを言っています。親鸞もその教えに従つて、人間が人間であるということは、そもそも罪を犯して生きていることなのだ、まさに罪悪深重の凡夫なのだ、どんな善根を積んでもその罪悪を拭い去ることはできないのだ、というふうと考えて、「いかなる行もおよびがたし」というふうに言っているわけがあります。「正像末和讃」の中に、次のような和讃があります。「自力聖道の菩提心（こころもことばもおよばれず ヒキもつてんばん 常没流転の凡愚は はつき いかでか発起せしむべき」）（聖典五〇一〜二頁）。自己の力と努力によつて道を求めるということは、罪悪性を抱えた人間には、不可能だということを言っているわけでありませう。そこには、深い絶望感があります。自力を完全に捨てているということがわかります。罪悪深重、煩惱熾盛の我々人間には、それを絶とうとするいかなる実践の道も閉ざされると、そういう自覚がこの和讃の中には表されております。ただ、しかし、そういうふうにあらゆる道が閉ざされると自覚している我々のところにこそ、私の慈悲というものはあると、このように考えるのが我々他力

の信仰であります。そういう絶対的な他力に徹したのが、親鸞であります。親鸞は、越後に流されたとき、すでに肉食妻帯していて、自分は非僧非俗——僧にあらず、俗にあらずと言っておりませんが、ここにも深い意味があります。つまり、自分自身はまさに煩惱に東縛された罪惡深重の身であって、僧としていかなる行もなし得ない存在である。全て僧としての禁欲の行は捨てざるを得ない。だから、僧にあらずと、このように親鸞は称したわけでありませぬ。しかし、そういうふうないかなる行もできない、それほど罪深い存在であるがゆえに救われるというふうに考えたからこそ、俗にあらずと言ったのだらうと思うわけです。矛盾した表現ですけれども、深い宗教的な真理を述べているように思います。『教行信証』でも、我々の本性は惡であって、どのような行為にもその本性は現れてくる。だから、どんな善行をしても、必ずその善行には毒が雑まじっていると言われています。そして、それを「雑毒まじどくの善」（聖典二二八頁）というように呼び、また「虚仮こけの行」（同）というように名づけて、これを我々は捨てなくてはならないと言っています。雑毒まじどくの善を掲げて浄土に往生しようとしても、断じてこれは不可能であるということをやっているわけですね。そこには、自分自身の中に果食う深い罪の自覚と、自力の道に対する深い絶望というものがあります。しかし、それゆえにこそ、救いへの深い希望というものがあるように思われます。深い罪の意識から一転して、だからこそ救われるというふうになり気が付いたとき、このとき、我々は深い宗教的な回心に出会います。それも、自分でやろうと思ってしまうわけではなく、まさに生かされて回心するという境に達するわけがあります。

任せる——回心

我々人間というものは悪に走りやすく、罪に溺れやすい。まさに煩惱に埋没する、そういう存在であります。それを自覚するとき、自分自身の惨めさというものを知らざるを得ないわけがあります。しかし、その惨めさを知ることには、我々にとつて幸いなこととあります。自分自身の無力とか惨めさを知ることによつて、自分の力で救われようとか、悟りを得ようとかは放擲ほうてきせざるを得なくなります。そうすると、全てを祈りに任せ、自分自身を偉大な力に任せることができるようになるわけがあります。自分を越える偉大なものに自分は生かされているのだということに思い至るわけがあります。これが最も深い宗教的な自覚ではないか。

親鸞は、若いとき、三十五歳のときであります。越後に流されて、藤井善信という俗名を名乗らせられました。そして、五年、流謫の生活を余儀なくされたのですが、あの越

後での流瀆の生活、あそこで、やはり親鸞の思想は深まったと思います。もはや僧の衣を着るということもできないし、数珠の代わりに鉢くわをもつて畑を耕し、自分の食う糧を得なければならなくなったわけであります。この越後での流瀆の体験、これが親鸞の信仰を深め、親鸞の信仰を大地にしっかりと根付かせた。そして、絶対他力の信仰を確立したのではないか。このとき、ある意味で、法然以上に、阿弥陀仏の本願力というものに全てを任すことができたのではないか。そして、まさに、自分の無力に悩む者にこそ、阿弥陀仏の本願力の救いというものは訪れるのであるという深い自覚を、はつきりと自覚したのではないかと思うのです。

回心、つまり、心が救いの方向へ大きく転回する。これは、突如として訪れる場合もありますし、段階を踏んで訪れるという場合もあります。親鸞の場合、必ずしも突如として訪れているとも言えません。段階を踏んで深まっているという面があります。比叡山を下りたときにも深いものがあつたのですが、やはり越後に流されて深くなったという面もあります。この回心の体験というのは、自分自身が生まれ変わる体験であります。自分も、自分を取り巻く世界も、全てが一変して、いわば「宇宙の大生命」に生かされているという体験であります。自分自身が自分を越える大きな力に帰属する、そこに抱かれている、そういう体験、これが回心の体験であります。そこには深い自己放棄というものがありません。

親鸞の場合、最初の回心は、おそらく比叡山を下りる決心をして、そして法然の門を叩いたときだと思えます。比叡山でどんなに学問や修行をしても、悟りを得ることができない。そういう自分自身に絶望した親鸞は、比叡山を下りて六角堂に籠ります。六角堂の救世親音の垂述すいじゆと信じられていた聖徳太子に、百ヶ日の祈願をかけて、毎日通います。そして、あと五日で満願というとき、その夜明け方でありすが、聖徳太子のお告げを聞きます。そのあと、親鸞は法然のもとへ行つて、法然の教えを聞くわけであります。その教えを体得するために、さらに百ヶ日、親鸞は法然のもとに通います。そして、絶対他力の信心を深く確立していきます。これが、親鸞の回心の体験、生まれ変わりの体験だつたと思われます。それから後、越後でもう一度深まっているというのが、私を見るところであります。いずれにしても、親鸞の場合は、法然との出会いというものがあつて、はじめて回心ということが可能になつたわけであります。

親鸞の信仰を模範にして考えてみますと、宗教というのはいったい何だろうか。それは、一言で申しますと、まさに絶対依存の信仰ということではないか。宗教というものは、自分自身の無力を自覚するところから出てまいります。そのとき、我々は自分の惨めさ、絶望というものに思い当たりますが、それを突き抜けて、全く自分自身が無に等しいものになったとき、初めて、自分を生かす大いなるものにぶつかるとして、それに自分は生かされていると深く自覚することができるのです。これが回心体験というものです。人間は無力であるけれども、無力であるがゆえに救われるのだということに気付くこと、これが回心の体験です。絶対的なものに依存している自分を見出して、そこに絶対的な信頼を置いて、自己の根源的な基盤を見出す。そうしますと、最初、自分自身を頼んでいた、なんとか自分の力で悟りを得ようと思っていたことは、あっさり否定されてしまいます。絶望に直面したところで、それがひっくり返って再び生かされる、そういう体験、これが宗教的な体験であります。我々は、普通、それを「生まれ変わる」という言い方をします。そのとき、我々は絶対的なものに付き従う存在になることができます。これが、宗教的な信を得るということに他ならないわけであります。親鸞の絶対他力の信仰というのは、そういう絶対依存という宗教の本質を、よく表しています。親鸞の言葉で言えば、「一切の計らいを捨てて」ということになりませぬ。罪悪深重の凡夫というものに徹し、一切の計らいを捨てて弥陀の本願力に全てを任せるところに、絶対他力の信仰は成り立ちます。罪悪深重の凡夫には、自力の行によって悟りを開くことは不可能であります。凡夫は、一切の自力の行を捨てて、ただひたすら仏を念じ、弥陀の本願に帰順する以外にありません。我々の浄土系の宗教では（聞）、聞くということを大事にいたします。「聞き従う」ということを大事にいたします。また、自分自身を全て任すということができませぬと、聞き従うということが出てくるのであります。阿弥陀仏の本願というのは海のように広大であつて、一切衆生を救おうという大悲心から発したものと云われます。私の宗教哲学的な立場から言いますと、「宇宙の根源的な生命力」のことを（弥陀の本願力）と言っているのだからと解釈できるのですが、自力を捨ててその本願の力に任せるとき、我々は救われるのだというものが、絶対他力の信仰であります。

だから、我々の浄土真宗の教えでは、やはり、信仰ということがなにより大事になってまいります。というか、信仰のみという立場を徹底しなければならない、その他は一切いらない、というふうには考えなければなりません。なぜかと言いますと、偉大なものへの絶対的な依存の感情というのは、信仰という形でしか現れてこないからであります。人間を

超える偉大な力に絶対的に帰属している、そういう宗教独特の感覚は、単なる理性、分別というようなものでは捉えることはできません。やはり、信仰するということがなければなりません。他のいろいろの修行をしても、それは得ることができません。信仰によってのみ救われるという立場を徹底する以外にないわけです。救いが与えられるのは、まさに信仰によってであります。

信心為本

親鸞は信心為本ということを申しております。「信心を本とする」ということです。親鸞の思想は、信仰のみに救済を求めたという点では、大乘仏教の長い歴史の中でも徹底したものでありました。親鸞は、自力で念仏してもだめだと言います。念仏と言いますと、百遍念仏したから救われるだろうというような考え方が出てまいりますから、それではだめなんだと言います。それよりも、念仏のもつと奥深くにある信仰、(信)を深めなくてはいいけないと言います。だから信心為本と言うわけです。

親鸞においては、念仏を申すということは、すでに信心を立てたことによって救われていることに対する感謝の表現だということになります。今ここに弥陀の本願力というものが働いているんだと自覚する、それが信であり、その感謝の念として自然と念仏が出てくる。それでよいのだというのが、親鸞の考えであります。『教異抄』でも「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとすべし」(聖典六二六頁)と書われています。信というものが第一にある、それさえあれば救われるのだという考えが披瀝されています。

だから、親鸞においては、もはや、念仏というのは、努力してなされねばならないもの、念仏行というものではないわけであります。ただ罪惡深重の凡夫の自覚に徹して、弥陀の本願の絶対慈悲の救済を信じて、名号をただ称えるだけでよいわけであります。それが「信仰のみ」という立場であります。親鸞においては、信を通してのみ、宇宙の実相に参入することができると考えられています。浄土系の思想の中でも、親鸞は特に晩年になればなるほど、この「信仰のみ」という立場を深めていったように思われます。

矛盾の中に宗教的真理がある

弥陀の本願を信するならば、煩惱は煩惱のままにしてこれの乗り越え、即座に悟りの世界、救いの世界に入ることができる。これが、我々浄土真宗の考えであります。そういう意味では、罪ある者こそ救われると考えるわけです。これも矛盾のように思いますが、この矛盾が大事であります。まさに、その矛盾の中にこそ、宗教的な真理が表現されていると考えねばなりません。それは、もはや分別で、あれこれ議論すべきことではありません。親鸞は、弥陀の誓願は不可思議であると言います。また、「念仏には無義をもつて義とす」（聖典六三〇頁）とも言っています。念仏は、あれこれ分別するものではないと言うのです。これは、弥陀の本願力の救いというのは合理的な判断を越えたものだということを意味します。いずれにしても、親鸞には、もはや自分の力で悟りを得ることはできない、凡夫にすぎないという深い自覚があります。ある意味で、信仰に徹するということもできない、絶えずぐらつく、そういう自覚から出発しております。しかし、そういう罪悪深重、煩惱熾盛のゆえに、仏の絶対慈悲の救いの手は差しのべられるのである、罪ある者にこそ阿弥陀仏の救いというものはあるのだと親鸞は考えるのです。

考えてみますと、何の罪もなく立派な人というのは、誰にも救ってもらわなくても、自分で救っているわけですから、助けはいらないわけです。ほんとうに、救いというものとは罪ある者にこそ必要なのであります。どうしても悟れない者にこそ必要なものであります。そのことを親鸞は一生言っていると思います。だから、親鸞は、その思想が深まれば深まるほど、もはや罪悪とか罪業というものを気にしなくなつてまいります。むしろ、罪業があるがゆえに救われるのだからありがたいというように考えるようになってきます。だから、罪業を乗り越えなくてはいけない、無理して乗り越えなくてはいけないとは考えなくなつてきます。罪業があるがゆえに、我々は弥陀の絶対的な本願力のはたらきに一切を任せることができる、救われるのだと、こういうふううに考えるわけがあります。

だから、矛盾に満ちているのだけれども、矛盾ゆえに、非常に深い信仰というものを、我々は親鸞から学ぶことができます。有名な悪人正機の説がそれです。悪人こそ救われるのだと、親鸞は言っています。これも、そういう考えからきています。親鸞の考えによりますと、自分自身の努力によつて悟りを開くということは、他力を頼む心が欠けているわけですから、これはむしろ本願に背いているということになります。いかなる修行もできない悪人こそ、救われねばならない。悪人こそ、自分自身の無力さを知るわけでありませう。そして、我々がその悪人であります。だから、悪人にこそ信は生まれます。そういう信を生む悪人にこそ、弥陀の本願はある、本願のはたらきが出てくると考える、こ

それが浄土真宗の絶対他力の考えであります。

親鸞の考えは徹底しておりまして、信心を疑うという心が起きても、これは煩惱のなせる業である、そして、煩惱をもっている者こそ救われるのだから、たとえ信心を疑ってもなお救われるのだと考えます。親鸞自身、実は、比叡山にいたときでも、越後に流されていたときでも、また関東で布教をしていたときでも、常に信心を疑うこと。ほんとうにこれで救われるのかと疑問に思うというようなことがあったように思います。しかし、そのたびに、そういう煩惱をもっている者こそ救われるのだから、絶対救われるという確信を繰り返して深めていったのが、親鸞であります。まことに深いものがあると云わねばなりません。親鸞にとつては、自己自身の中にある罪惡生死の凡夫性、これに対する深い自覚こそ、まさに弥陀の本願力への絶対的信仰への唯一の通路であつたと考えられます。如来の救いの手は、煩惱の渦巻く世界にこそ差しのべられねばならない。地獄必定と自覚することが、すなわち浄土往生の約束となる。まさに逆説なんですけれども、逆説にこそ、浄土真宗および宗教というものの深い真理が隠されていると言わねばなりません。

悪人正機——時代的な自覚

翻つて、人間の歴史というものを考えてみますと、我々一人ひとりの中に潜む罪惡の凡夫性ばかりでなく、それが固まって我々が昔から今日に至るまで積み重ねてきた人類の歴史そのものが、まさしく煩惱生死の迷いの歴史であつたと申せましょう。人間の歴史というのは、戦争、殺戮、闘争、貪欲、憎悪、愚行、こういうものの繰り返しでありました。そういう意味では、人間は、昔から、人間が人間として成り立つたときから、まさに汚辱にまみれた穢土にのたうち回っていたとも言えるわけです。

仏教では有名な歴史観があります。正像末史観です。親鸞もこの史観を採用しています。この親鸞の歴史観によりますと、現在——親鸞の生きていた時代ですが、それはすでに末法の時代であるということになります。教えは存在するのだけれども、もう誰も悟りを開くことができない。そういう絶望的な時代だというふうに見られております。時代的な絶望というところからも、親鸞の信仰は出発しております。仏陀とのつながりを失って、仏法にも見放されてしまった、そういう運命的な時代なんだと、親鸞はあの時代を見ているわけです。そこを生きていかねばならない親鸞においては、自分自身が生きている時代というのは、五濁惡世の時代であつて、無仏の時だと見られているわけです。だから、もはや、そのようなところで、一生懸命修行しても、自力の行をいくらやってもだめだと考え

られます。しかも、親鸞は、そういう時代の重荷を自分自身に背負っているわけです。末法への深い自覚、人間の煩惱の一番極に来た時代での人間に対する絶望というものから親鸞は出発しています。そして、末法的な時代と人間の在り方を事実として認め、それを背負って、その極限の中から救いの道を求めていった。そういう時代的な深い認識があったからこそ、全ての自力を捨てて、念仏の中に自分自身を放下して、自分自身の罪惡をそのままにしながら、弥陀の本願力の救いに身を任せる決断をする以外にないと考えていったのです。時代はすでに末法であって、人間はすでに絶望である。しかし、それゆえにこそ、我々はほんとうの信心に至り着くことができる。そういうふうには、親鸞は考えるわけであります。悪人正機の説と言いますが、そこには、時代的な自覚というものもあつたと思われまゝ。我々はよく「正信偈」を唱えますけれども、その中にこういう一節があります。そこでは、「三不信の誨、慙懃にして、像末法滅、同じく悲引す」（聖典二〇六頁）と述べられています。つまり「信心雜りけなく、一向にして相續するならば、像法の末であるが、法滅の時代であろうが、まさにそれゆえにこそ大悲の救いがある」という意味であります。ここにも深いものがあります。歴史はすでに終末を迎えているけれども、純粹の信仰を持続していくならば必ず救いはあるという確信が述べられています。

今、親鸞の課題から学ぶ

人間の歴史は、ある意味で、全てが末法・法滅であつたのかもしれない。しかし、人間の歴史全てが、すでに（大なる宇宙の生命）と申しますか、（弥陀の本願力）と申しますか、そういう大きなものに支えられているのだという自覚を、親鸞は深くしていきました。そういう自覚の上に、殺戮止まない平安末期から鎌倉のあの時代を生き抜いていった人、それが親鸞だったので。

我々が生きている現代のことを考えますと、豊かな時代ではありませんけれども、二十世紀全体を考えますと、戦争ばかりやってきて、人を殺してきた時代でもあります。これほど人を殺してきた時代はありません。さらに、最初に申しましたように、打ち続く青少年犯罪のことなどを考えますと、ほんとうに法滅の時代ではないかと思うわけがあります。そういう法滅の時代なればこそ救いはある、弥陀の本願の救いは必ずあるのだということ、我々は親鸞の信仰から学び取ることができます。親鸞は、一生かけて人間の闇の部分にくぐり抜け、そのくぐり抜けていったところから、救いを求めていきました。罪の問題とか現代の問題というものを深く考えますと、親鸞の全実存をかけた深い信仰というもの

に、こういう時代だからこそ、学ぶべきものがあるのではないかと思っております。
私は、哲学出身ということもあり、なかなか宗教的な真理について分かりやすく申し上げることができません。特に、時代の問題、現代の問題と宗教というものを今まで考えてまいりました私としては、親鸞の思想への傾倒といえますか、それをますます深くするこの頃であります。そういう最近の心境を申しまして、私の拙いお話を終らせていただきます。

二〇〇〇（平成十二）年十一月二十八日 高倉会館親鸞聖人讃仰講演会抄録